



特集

シルヴァン・カンブルラン

読響常任指揮者

×

松井孝治 慶應大教授

もっと自由になれば 特別な音が生まれる

シルヴァン・カンブルラン氏が読売日本交響楽団の常任指揮者に就任して4年半あまりが経ちました。読響の現在と今後、そして目前に控える欧州公演についてどう考えているのか。

クラシック音楽に造詣が深く、読響会員でもある松井孝治慶應大教授と語り合っていました。

松井孝治氏 「マエストロが最初に読響を指揮された2006年の年末、読響はマエストロのファンになり、恋に落ちたと聞いたのですが、読響の初印象はどうでしたか？」

カンブルラン氏 「私も、初めて読響を指揮した時に恋に落ちました。両想いです。素晴らしい規律や集中力といった、欧州のオケとの違いにすぐに気が付きました。最初のころの演奏会でメシアンやベートーヴェンなどを演奏しましたが、クオリティの高さにとても驚きました」

松井氏 「この8年間で読響はずいぶん変わったと思います」

カンブルラン氏 「古典派、ロマン派、

現代音楽などを演奏する際、瞬時に切り替える対応力が高まっています。互いの音をこれまでになくくらい聴き合うこともできています。つまり、(指揮者とオーケストラの)『結婚はうまくいっている』と言えますね」

松井氏 「マエストロの演奏会を聴いて、読響の表現の幅や音質がとても多彩になったと感じています」

カンブルラン氏 「読響はもともと素晴らしい音色を奏でるオーケストラで、たくさんの可能性を秘めています。素晴らしいピアニッシモを奏でることができる。管楽器はアーティキュレーション(発音、表情)が大切。正しい音色を見つけて表現しなければなりません



ん。『もっと暗く』『もっと明るく』と言って音を求めたり、『夜の音』『朝の音』『太陽が出ているときの音』と言ったりすることもあります。詩のように音を言葉で表現するのは、フランス人だからこそ、なのかもしれません」

松井氏 「これまでいろいろな日本のオーケストラを聴いて、アンサンブルが非常に整った演奏が多いけれど、来日した一部の欧州のオーケストラの演奏と比べると音色の多彩さとか、表現の幅が違うように思っていました。日本のオーケストラは生真面目過ぎないかなど。そこが最近変わり始めているように感じます」

カンブルラン氏 「日本のオーケストラは、演奏はうまいが冷たいと言う人がいます。私はそう思いませんが、『この音楽はこのように演奏されるべきだ』と音楽大学で学んできたことをそのまま演奏する傾向にある、とは言えるかもしれません。『ファンタジー』の要素がやや足りない。時と場合によってはもっと自由であることが大事だと思うのです」

「今の読響には、自由な要素が多分

にあるのですよ。リハーサルではさまざまな個所を修正していきませんが、本番前のリハーサルでは、『これまでやってきたことはすべて忘れて演奏しよう!』とオーケストラに伝えています。『とにかく楽しんで!』と。本番ではその場で瞬間的に出てくる音とともに楽しむことができます。それが特別な音楽が生まれる瞬間なのだと思います。アンサンブルが完璧にできた後は、自由になる。ただ、それだけのことです」

松井氏 「聴衆としての印象から言うと、同じホールで読響と、外来のオーケストラを聴くと、マエストロが指揮する読響により強い感銘を受けるという経験が多い。日本人は欧州のオーケストラを崇めるところがあるのですが、実は日本には素晴らしいオーケストラがあると感じています。常任指揮者になって4年半少したちますが、読響にのっての課題はどうお考えでしょう」

カンブルラン氏 「実は、私は過去のことはすべて忘れてしまうのです。『今』が大事なのです。常に何かに変化して





特集

シルヴァン・カンブルラン

読響常任指揮者

×

松井孝治 慶應大教授

もっと自由になれば 特別な音が生まれる

シルヴァン・カンブルラン氏が読売日本交響楽団の常任指揮者に就任して4年半あまりが経ちました。読響の現在と今後、そして目前に控える欧州公演についてどう考えているのか。

クラシック音楽に造詣が深く、読響会員でもある松井孝治慶應大教授と語り合っていました。

松井孝治氏 「マエストロが最初に読響を指揮された2006年の年末、読響はマエストロのファンになり、恋に落ちたと聞いたのですが、読響の初印象はどうでしたか？」

カンブルラン氏 「私も、初めて読響を指揮した時に恋に落ちました。両想いです。素晴らしい規律や集中力といった、欧州のオケとの違いにすぐに気が付きました。最初のころの演奏会でメシアンやベートーヴェンなどを演奏しましたが、クオリティの高さにとても驚きました」

松井氏 「この8年間で読響はずいぶん変わったと思います」

カンブルラン氏 「古典派、ロマン派、

現代音楽などを演奏する際、瞬時に切り替える対応力が高まっています。互いの音をこれまでになくくらい聴き合うこともできています。つまり、(指揮者とオーケストラの)『結婚はうまくいっている』と言えますね」

松井氏 「マエストロの演奏会を聴いて、読響の表現の幅や音質がとても多彩になったと感じています」

カンブルラン氏 「読響はもともと素晴らしい音色を奏でるオーケストラで、たくさんの可能性を秘めています。素晴らしいピアニッシモを奏でることができる。管楽器はアーティキュレーション(発音、表情)が大切。正しい音色を見つけて表現しなければなりません



ん。『もっと暗く』『もっと明るく』と言って音を求めたり、『夜の音』『朝の音』『太陽が出ているときの音』と言ったりすることもあります。詩のように音を言葉で表現するのは、フランス人だからこそ、なのかもしれません」

松井氏 「これまでいろいろな日本のオーケストラを聴いて、アンサンブルが非常に整った演奏が多いけれど、来日した一部の欧州のオーケストラの演奏と比べると音色の多彩さとか、表現の幅が違うように思っていました。日本のオーケストラは生真面目過ぎないかなど。そこが最近変わり始めているように感じます」

カンブルラン氏 「日本のオーケストラは、演奏はうまいが冷たいと言う人がいます。私はそう思いませんが、『この音楽はこのように演奏されるべきだ』と音楽大学で学んできたことをそのまま演奏する傾向にある、とは言えるかもしれません。『ファンタジー』の要素がやや足りない。時と場合によってはもっと自由であることが大事だと思うのです」

「今の読響には、自由な要素が多分

にあるのですよ。リハーサルではさまざまな個所を修正していきませんが、本番前のリハーサルでは、『これまでやってきたことはすべて忘れて演奏しよう!』とオーケストラに伝えています。『とにかく楽しんで!』と。本番ではその場で瞬間的に出てくる音とともに楽しむことができます。それが特別な音楽が生まれる瞬間なのだと思います。アンサンブルが完璧にできた後は、自由になる。ただ、それだけのことです」

松井氏 「聴衆としての印象から言うと、同じホールで読響と、外来のオーケストラを聴くと、マエストロが指揮する読響により強い感銘を受けるという経験が多い。日本人は欧州のオーケストラを崇めるところがあるのですが、実は日本には素晴らしいオーケストラがあると感じています。常任指揮者になって4年半少したちますが、読響にのっての課題はどうお考えでしょう」

カンブルラン氏 「実は、私は過去のことはすべて忘れてしまうのです。『今』が大事なのです。常に何か変化して





いる。50回、80回と指揮をしたことのある曲であっても、毎回初めてその曲を指揮するかのよう、そして、その曲を指揮するのが最後であるかのように演奏する、ということです。楽団員の皆さんにもそのように音楽に向き合ってほしいと常々伝えていきます。例えば、ベートーヴェンの交響曲は、ベテランの楽団員なら何百回と演奏したことがあるでしょう。でも、毎回同じということはない。常に新しい何かがあるそこにはあります。私たちの解釈で毎回音楽と向き合いながら演奏する、ということなのです。また、演奏会ごとに『こういう方向でやりましょう』と必ず示すようにしています。その方向性とは、我々の信じるその時のベストなものでなくてはなりません」

松井氏 「楽団員の皆さんのマエストロの音楽への理解がさらに深まっている

ということでしょうか」

カンブルラン氏 「指揮棒を通じて伝わっていると思います。リハーサルの段階では、言葉も使って表現していますが、技術的なことを言うときのみです。時には歌ったり、泣き声を出したり、いろいろな音を自分の声で発することもありますが、しかし、最終的には、指揮棒の表現そのものなのです。だからこそ、指揮者によって音が変わる。一つの銅像を創るような過程を、オーケストラと共有しています。言葉でオーケストラと会話すること、指揮棒でコミュニケーションを図るといふ、この絶妙なバランスが大事ですね。そしてどの音楽も透明、つまりクリアであるべきなのです。たとえば、ブルックナーのように壮大な音楽であっても。楽団員には、『耳で音楽を創る』ということ常々伝えていきますし、読響はよく理解してくれていると感じています」

松井氏 「まもなく欧州公演ですね。メシアン、ドヴォルザークなどを指揮される予定ですが、本場の欧州でどのように日本のオーケストラをアピールされようとしているのでしょうか」

カンブルラン氏 「読響をクオリティの高いオーケストラとして紹介したいですが、それ以上に読響の持つ繊細さを伝えたい。どんなジャンルの曲でもその繊細さをもって表現できることを欧州の人たちに知ってもらいたい。欧州の音楽を欧州のオーケストラと同等に、あるいはそれ以上に演奏できるこ

とを証明したいと思います。欧州の聴衆は、オーケストラと指揮者の関係を敏感に感じ取ります。読響と育ててきた『信頼』を表現できることを楽しみにしています。今回のプログラムは、読響が楽曲ごとに瞬時に音を変えることができることを証明する最高の内容です。欧州の聴衆にとっても納得のいく演奏を届けることができると信じています」

松井氏 「メシアンやドヴォルザークの曲をそれぞれの都市でメインにされた狙いは？」

カンブルラン氏 「今回はベルリン、ケルンをはじめ、欧州の非常に良いホールで演奏します。街によっては伝統的な曲を好むところもあり、武満徹を取り上げるオーケストラはそう多くありません。でも、私は今回、日本人作曲家の曲をプログラムに入れたかった。バルトークのヴィオラ協奏曲もそれほど演奏機会は多くありません。バルトークはストラヴィンスキーでもなく、メシアンでもドビュッシーでもない。時代を超えた作曲家を取り上げる非常に特別なプログラムを届けたいと思ったのです。アイヴズの〈答えのない質問〉も演奏します。あまり知られていませんが、とても神秘的な曲です。ドヴォルザークが交響曲第9番を作曲したのは、アイヴズがこの曲を作曲するたった15年前の

ことなのです。ドヴォルザークが〈新世界〉を創り、それが20世紀への架け橋になったのです」

松井氏 「長く読響を聴き続けているとオーケストラの成熟を実感しますし、これからさらにどんなに素晴らしいオーケストラになっていくのか楽しみでもあります。今回の欧州公演も、飛躍になりますね。読響のさらなる発展に必要な要素は何でしょうか」

カンブルラン氏 「今でも素晴らしい状態だと思いますよ。ただ、一つの演奏会ごとに3日間練習、そして本番と細かく日程が決まっています。2時間の曲をたった3日間のリハーサルで仕上げるのは難しい。メシアンの4時間の大曲は、ほぼ不可能でしょう。読響がこのような素晴らしい曲を、現在あるリハーサルなどの制約上取り上げられないのは、今後の課題と考えられます。特別なことをするには新たな試みが必要だし、それが可能性を開くことになるでしょう」



松井氏 「マエストロにとって理想のオーケストラとは？」

カンブルラン氏 「大切なのは、オーケストラとしての確固たるアイデンティティを持つことではないかと思えます。私が思う最も素晴らしいオーケストラはロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団ですが、コンサートヘボウ管は、ベルリン・フィルと同じような演奏はしません。我々は、『自分たちならではの音を持つ読響』というアイデンティティが最も大切ではないでしょうか。私の望みは、世界中探してもど

こにもない音を奏でる日本のオーケストラ、読響という存在を世界に示すことです。読響に対してもコンサートヘボウ管を真似るのではなく、アイデンティティを確固たるものにするという方向性を持って取り組んでいるところです」

松井孝治 (まつい こうじ)

慶應義塾大学総合政策学部教授

1960年生まれ。東大卒業後、通商産業省に入省。2000年に退官後、参院議員(2期)。2012年に政界を引退した。読響の会員。慶應大では、統治機構(政治)とともに古典芸能の研究にも取り組んでいる。

■公演日程表

日程	会場	都市(国)	プログラム
2015年3月2日(月) 20:00開演	ベルリン・フィルハーモニー 大ホール	ベルリン(ドイツ)	A
3月3日(火) 19:00開演	ワルシャワ・フィルハーモニーホール	ワルシャワ(ポーランド)	A
3月5日(木) 20:00開演	ケルン・フィルハーモニー 大ホール	ケルン(ドイツ)	A
3月7日(土) 20:15開演	ティヴォリ・フレデーデンブルフ 大ホール	ユトレヒト(オランダ)	B
3月8日(日) 15:00開演	パレ・デ・ボザール	ブリュッセル(ベルギー)	B

■プログラム

- A 武満徹：鳥は星形の庭に降りる
バルトーク：ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン：ニルス・メンケマイヤー)
アイヴズ：答えのない質問
ドヴォルザーク：交響曲第9番(新世界から)
- B 酒井健治：ブルーコンチェルト(読響委嘱作品・欧州初演)
メシアン：トゥーランガリラ交響曲
(ピアノ：アンジェラ・ヒューイット、
オンド・マルトノ：シンシア・ミラー)

指揮：シルヴァン・カンブルラン(読響常任指揮者)

2015年3月 読売日本交響楽団 欧州公演

■公演地紹介 ～ブリュッセル～

豊かな文化を育んだヨーロッパの要所 オヤマダ アツシ ■音楽ライター

2015年の欧州公演で有終の美を飾るのは、ベルギーの首都であるブリュッセル。石畳の大広場(グラン・プラス)がユネスコの世界遺産に指定されているこの都市は、12世紀頃から流通の要所として栄え、ヨーロッパの政治や宗教史、文化史においても重要な役割を果たしてきた。現在もEU(ヨーロッパ連合)やNATO(北大西洋条約機構)の拠点になっており、ヨーロッパの中心として時代をリードしている。

音楽史の中では15世紀から16世紀にかけて、ブリュッセルを含むフランドル地方から、ジョスカン・デ・プレを筆頭に多くの有能な作曲家を輩出。また美術においてもブリューゲルらがブリュッセルで活躍し、豊かな文化の発信地だったと言えるだ

ろう。音楽シーンでは、1700年に創立され、建物自体が歴史的な遺産である「モネ劇場」(ベルギー王立歌劇場)の存在が際立っている。かつてカンブルランが音楽監督を務め、来日公演も注目された由緒あるオペラハウスだ。

読響が3月8日(日)にコンサートを行う「パレ・デ・ボザール」は、アール・ヌーヴォー様式の外観が美しい文化センター。その中にある2100席の大ホール「Henry Le Bœuf(アンリ・ル・ブフ)」は、モダンな内装と鮮明な音響が特徴であり、ベルギー国内外の著名なオーケストラがコンサートを行っている。カンブルランと読響による酒井健治およびメシアンの名演は、豊かな響きとなってホールを満たすだろう。

■ブリュッセルへの想い

師とカンブルランの縁の地で演奏できる喜び

私の滞在していたアントワープからブリュッセルまでは電車で30分ほどなので、今度のツアーで訪れるパレ・デ・ボザール(Bozar)には、よく演奏会を聴きに通っていました。Bozarでは著名な演奏家や世界中のオーケストラの演奏会が毎晩開かれており、エリザベート王妃国際音楽コンクールの舞台でもあります。

私が留学中に師事していた先生は、以前ブリュッセルの王立モネ劇場で首席ヴァイオリン奏者を務めており、当時の音楽監督がカンブルラン氏だったそうです。今回弟子の私がカンブルラン氏とともにこの地で演奏することに、深い縁を感じています。



ヴァイオリン
渡邊千春

2006年から2年間、ベルギー・アントワープ王立音楽院に留学

読響 2015-16 シーズンの 聴きどころ 〈ソリスト編〉



ピアノ (海外)



アンドレアス・シュタイアー
Andreas Schick

フォルテピアノなど古楽器の演奏で名高い**アンドレアス・シュタイアー** (5月)が、読響に初登場します。もちろん現代のピアノでの演奏にも卓越した技量を持っており、今回はそのモダン楽器でコンチェルトを弾く貴重なチャンスとなります。取り上げるのは、モーツァルトの隠れた傑作である**ピアノ協奏曲第17番**。現代の古典派演奏に不可欠な様式感をしっかり備えた、独自の音楽観を表します。



デニス・マツエフ
Denis Matsuzev

ロシアを代表する名手**デニス・マツエフ** (6月)は、巨匠ユーリ・テミルカーノフからの直々のご指名で、2公演のために来日します。**プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番**は先鋭なモダニズムが炸裂する技巧的な作品だけに、ロシア伝統の奏風が全開となったパワフルな“爆演”にご注目ください。

フランスで期待を集める才媛**リーズ・ドゥ・ラ・サール** (11月)も初登場です。人気の**ラフマニノフのピアノ協奏曲第2**

番をフィンランドの名匠オスモ・ヴァンスカと共演し、強 韌な打鍵と軽やかなリズムで、会場を熱狂へと導きます。《大阪定期演奏会》でも、このコンビでお届けします。

欧州で高い評価を得るスイス生まれの新鋭**フランチェスコ・ピエモンテージ** (16年1月)は、リストの**ピアノ協奏曲第2番**で深い音楽性を披露します。ファンタジー豊かな曲想に合わせて、テクニックだけでなく独特の美意識と感性をもって、リスト作品の芸術性に迫ります。

ピアノ (日本)

ドイツを拠点に活動する**河村尚子** (5月)は、近年も充実した演奏を続けています。巨匠ユーリ・テミルカーノフとの**ラヴェル〈左手のためのピアノ協奏曲〉**は、双方にとって目新しいプログラム。意欲に満ちた新境地を見せてくれることでしょう。

9月には、ジャズ界の風雲児・**小曽根真**が、なんと読響常任指揮者のシルヴァ



リーズ・ドゥ・ラ・サール
Lynn Goldsmith



フランチェスコ・ピエモンテージ
Julien Mignot



河村尚子
Hirofumi Isaka



小曽根真
Koizumi Masahiro

ン・カンブルランと心躍る初共演を果たします。演目は、小曽根が得意としている**ラフマニノフ〈パガニーニの主題による狂詩曲〉**。グループ感に富んだジャジーな感性を生かして、想像を超えたファンタジーあふれる世界へ聴衆を誘います。



辻井伸行
Yuji Hori

ヴァン・クライバーン国際コンクール優勝を経て、世界各地で活躍する**辻井伸行** (16年2月)は2012年以來の登場。**ベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番**を、常任指揮者カンブルランと共演します。熱い気持ちがかもった豊かな音楽性の発露に、期待が高まります。



田部京子
Akira Muto

近年ますます瑞々しい音楽性に磨きがかかっている**田部京子** (16年3月)は、**モーツァルトのピアノ協奏曲第20番**という短調の作品で、様式美ある“大人の演奏”を繰り広げます。



菊池洋子
Kikuchi Yoko

よみうり大手町ホールでの《読響アンサンブル・シリーズ》では、古典派作品で定評を得た**菊池洋子** (11月)が、モーツァルトとベートーヴェンの**五重奏曲**を弾きます。木管楽器との合奏に注目です。充実した演奏活動を各地で展開している**小山実稚恵** (16年1月)は、シューベルトの傑作〈ます〉で、読響メンバーと極上のアンサンブルを紡ぎます。



小山実稚恵
Kazuo Matsuura

ヴァイオリン

チャイコフスキー国際コンクール優勝後も躍進を続ける**神尾真由子** (6月)が、約4年ぶりに登場します。**サン＝サーンスの傑作、ヴァイオリン協奏曲第3番**はフランス流のエスプリが魅力。共演する指揮者フランソワ＝グザヴィエ・ロトのお国ものに当たるうえ、彼が得意とする古楽器奏法を生かした音楽作りとのマッチングに関心が集まりそうです。この曲も、《大阪定期演奏会》の目玉のひとつです。



神尾真由子
Hirofumi Isaka

近年の進境が著しい実力派が**諏訪内晶子** (9月)。読響とは14年ぶりとなる共演で、**モーツァルトのヴァイオリン協奏曲第5番〈トルコ風〉**を艶やかに奏でます。近年は室内楽フェスティバルなどにも精力的に取り組んでおり、芸風の広がりを反映した懐の深いソロを聴かせてくれるでしょう。



諏訪内晶子
Kiyotaka Saito

若くして濃密な音楽性を備える**郷古廉** (7月)は、銘器ストラディヴァリウスでベルクの**ヴァイオリン協奏曲**を披露します。



郷古廉
Ryo Koyama

ドイツ期待の若手、**ヴェロニカ・エーベルレ** (7月)は、2014年にサイモン・ラトル指揮でロンドン響とのデビューを果たすなど、続々と世界の大舞台へ進出しています。読響とは**メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲**を演奏。共演する指揮者が、こ



ヴェロニカ・エーベルレ
Veronika Eberle

れまた注目の新鋭、ジェレミー・ローレルで、フレッシュな顔合わせです。



ダニエル・ゲーデ ©読響

読響コンサートマスターの**ダニエル・ゲーデ**(7月)は、元ウィーン・フィルのコンサートマスターという経歴を誇る名手。ブーム



エリナ・ヴァハラ ©Laura Riihela

スの**ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲**での輝かしい音色は要注目です。欧米で注目を浴びるフィンランド出身の**エリナ・ヴァハラ**(11月)は得意のシベリウスで、この作曲家の生誕150周年に華を添えます。



アレクサンダー・シトコヴェツキー

メニューインに認められた俊英**アレクサンダー・シトコヴェツキー**(6月)は、よみうり大手町ホールでのアンサンブル・シリーズで読響デビューを果たします。

弦楽器・管楽器など



鈴木康浩 ©読響

読響が世界に誇る“ヤス”ことソロ・ヴィオラの**鈴木康浩**(10月)。ヴィオラのための傑作を数多く残した**ヒンデミット**が、親しみやすい民謡の旋律を基に協奏曲風に仕上げた**〈白鳥を焼く男〉**で、この楽器の魅力を存分に発揮してくれるでしょう。



宮田大 ©Yukio Kojima

チェロの**宮田大**(4月)は、日本を代表する大器へ成長している最中の気鋭です。チャイコフスキー**〈ロココ風の主題による変奏曲〉**で、美しい旋律を朗々と歌い上げます。読響

とは昨秋、エルガーのチェロ協奏曲で好評を得るなど、関係を深めています。

ドイツを拠点に活躍する実力派の**グスタフ・リヴィニウス**(7月)は、**ダニエル・ゲーデ**と**ブラームス**の**二重協奏曲**を演奏。

旧EMIレーベルからCDをリリースしている新星チェリストの**アンドレアス・ブランテリド**(8月)は、ロンドン・フィルやライブツィヒ放送(MDR)響に続いて、待望の日本デビューを飾ります。



アンドレアス・ブランテリド ©Sussie Ahlburg

ソリストや室内楽奏者として着実にキャリアを積んでいる**遠藤真理**(9月)は、よみうり大手町ホールでの**ハイドンのチェロ協奏曲第1番**で優れた技巧を發揮します。



遠藤真理 ©中山かつみ

ウィーン・フィルのハープ奏者として世界の聴衆を魅了している**グザヴィエ・ドゥ・メストレ**(16年1月)は、「南米のバルトーク」**とも**称賛される**ヒナステラ**の**ハープ協奏曲**を、鮮やかな指さばきで聴かせます。



グザヴィエ・ドゥ・メストレ ©Marco Borggreve

数々の国際ギター・コンクールで優勝している**朴葵姫**(16年3月)は、**ロドリゴ**の名作**〈アランフェス協奏曲〉**で、スペインの香りに満ちたドラマを作り上げます。



朴葵姫

世界的トロンボーン奏者の**クリスチャン・リンダバーグ**(5月)とともに**サンドストレーム**の作品でソロを務めるのは、読響首席ト



クリスチャン・リンダバーグ ©Mats Backer

ロンボーン奏者の^{くわたあきら}**栗田晃**。丁々発止の掛け合いにご期待ください。



栗田晃 ©読響

読響からは首席クラリネット奏者の**金子平**(5月)も、**ニールセン**の**クラリネット協奏曲**に登場。洗練された音色と技巧を駆使して、北欧の叙情をさわやかに描き出します。



金子平 ©読響

人気のオーボエ奏者**セリーヌ・モワネ**(10月)は、ドレスデン国立歌劇場でソロ・オーボエを務める実力者。甘い音色をご堪能ください。



セリーヌ・モワネ

歌手

注目の**ワーグナー**〈**トリスタンとイゾルデ**〉(全3幕/演奏会形式、9月)には、カンブルランが音楽総監督を務めるシュトゥットガルト歌劇場の、2014年7月の新演出上演で成功を収めた声楽陣が、ほぼ同じメンバーのまま来日します。トリスタン役は、欧州の主要歌劇場に次々とデビューしている若手**エリン・ケイヴス**。



エリン・ケイヴス

イゾルデ役は、迫力ある歌唱が魅力の**クリスティアーネ・イーヴェン**。ブラングーネ役は、ワーグナーを得意とし、フランクフルト歌劇場などで歌う**クラウディア・マーンケ**。マルケ王役は、ワーグナーの本場バイロイト音楽祭の常連の**アッ**



クリスティアーネ・イーヴェン ©Christine Schneider



クラウディア・マーンケ ©Monika Rittershaus

ティラ・ユン。その他、シュトゥットガルト歌劇場の専属歌手の**石野繁生**らが脇を固めます。



アッティラ・ユン

ドイツのアルテンブルク・ゲラ市立歌劇場に長年出演し、栄えある「宮廷歌手」の称号を得たバリトンの**小森輝彦**(4月)は、カンブルランの指揮でリームの**〈厳粛な歌—歌曲付き〉**を日本初演します。バイロイト音楽祭に出演するなど、国際的に評価が高いメゾ・ソプラノの**小山由美**(6月)は、巨匠ユリー・テミルカーノフが振る**マーラー**の**交響曲第3番**でソリストを務めます。



小森輝彦

年末恒例の**〈第九〉**(12月)では、上岡敏之の指揮で国際的に活躍する4人が歌います。ソプラノの**イリーデ・マルティネス**は、ミラノ・スカラ座やウィーン国立歌劇場などで人気を高める歌姫。メゾ・ソプラノの**清水華澄**は、伸びやかな美声と類まれな音楽性を誇る期待の新星です。テノールの**吉田浩之**は、軽やかで透き通る声が魅力の経験豊かな本格派。バリトンの**オラフ・シグルザルソン**は、ザールブリュッケン歌劇場などドイツを中心に歌っている実力者です。



小山由美



イリーデ・マルティネス ©Grupo Nación



清水華澄



吉田浩之 ©Eiji Shinohara



オラフ・シグルザルソン ©Karl Pettersson

Concert Schedule

2015. 3月

交響曲とオペラアリアなどでモーツァルトの魅力に迫る！
世界の聴衆を魅了する歌姫メイが、美声を披露

2015年3月19日(土) 19:00 サントリーホール

◆第580回サントリーホール名曲シリーズ

2015年3月21日(土) 14:00 東京芸術劇場

◆第175回東京芸術劇場マチネーシリーズ

指揮：ジェラルド・コルステン

ソプラノ：エヴァ・メイ

モーツァルト：交響曲第38番〈プラハ〉

モーツァルト：演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉

モーツァルト：演奏会用アリア〈うるわしい恋人よ、さようなら〉

モーツァルト：歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲

モーツァルト：歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿”

モーツァルト：歌劇〈イドメネオ〉から“オレステとアイアスの苦しみを”

モーツァルト：交響曲第35番〈ハフナー〉

*曲目が一部変更されました。



ジェラルド・コルステン



エヴァ・メイ

ヨーロッパで活躍する名匠コルステンが4年ぶりに登場
二つの傑作〈ジュピター〉& 〈英雄の生涯〉を指揮

2015年3月27日(金) 19:00 サントリーホール

◆第546回定期演奏会

指揮：ジェラルド・コルステン

モーツァルト：歌劇〈劇場支配人〉序曲

モーツァルト：交響曲第41番〈ジュピター〉

R.シュトラウス：交響詩〈英雄の生涯〉



ジェラルド・コルステン

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00/年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

3月公演の聴きどころ

渡辺 和彦

(わたなべかずひこ・音楽評論家)

3月の読響は、《サントリーホール名曲シリーズ》(19日)と《東京芸術劇場マチネーシリーズ》(21日)、そして《定期演奏会》(27日、サントリーホール)のすべてが、ジェラルド・コルステン指揮。このうち、別項にもあるように、《定期》以外の19、21日は、人気ソプラノのエヴァ・メイが客演して、モーツァルトの交響曲2曲の間にアリア4曲が歌われる。

指揮者コルステンは2008、11年に続く3度目の読響客演。前回もエヴァ・メイとの共演があった。コルステンはもともとガラミアンやヴェーグに学んだヴァイオリニストで、1987年から96年までヨーロッパ室内管弦楽団(クラウディオ・アバド指揮)のコンサートマスターとして活躍。この間、ソリストやコンサートマスターとして「11回か12回」(前回来日時の本人インタビュー)日本を訪れている。

今回のプログラムである〈英雄の生涯〉他は、11年3月14日(東日本大震災3日後)に読響と共演する予定が、計画停電の影響等で公演キャンセルになったプログラムとまったく同一。なお彼は現在、ロンドン・モーツァルト・プレイヤーズの音楽監督の地位にある。

《定期》は、〈英雄の生涯〉と、モーツァルト〈ジュピター〉。前者はコンサートマスターによる長いヴァイオリン・ソロ(今回は長原幸太が担当する)があることで知られる。このパートに人を得ると、〈英雄の生涯〉は一層聴きばえがする。ヴァイオリニスト出身のコルステンが、そのあたりのツボを心得ているのはもちろんだ。彼のモーツァルトも、《定期》と19、21日で「後期6大交響曲」のうちの3曲(第35、38、41番)が聴ける。

エヴァ・メイについては「今さら」と言われるのを覚悟で紹介すると、モーツァルト作品やイタリア・オペラのリリコ・レジーエロとして、また教会音楽のソリストとして世界の歌劇場で歌っているイタリアの名ソプラノ。日本へは05年に初来日、以後来日を重ねている。

もうひとつ、2月に続いて3月も、東京芸術劇場との提携事業として、30日に《0才から聴こう!! 春休みふれあいコンサート》が予定されている。この日の指揮者、梅田俊明は06年まで仙台フィルの常任指揮者を務め、これまで読響への客演も多い。



いる。50回、80回と指揮をしたことのある曲であっても、毎回初めてその曲を指揮するかのよう、そして、その曲を指揮するのが最後であるかのように演奏する、ということです。楽団員の皆さんにもそのように音楽に向き合ってほしいと常々伝えていきます。例えば、ベートーヴェンの交響曲は、ベテランの楽団員なら何百回と演奏したことがあるでしょう。でも、毎回同じということはない。常に新しい何かがあるそこにはあります。私たちの解釈で毎回音楽と向き合いながら演奏する、ということなのです。また、演奏会ごとに『こういう方向でやりましょう』と必ず示すようにしています。その方向性とは、我々の信じるその時のベストなものでなくてはなりません」

松井氏 「楽団員の皆さんのマエストロの音楽への理解がさらに深まっている

ということでしょうか」

カンブルラン氏 「指揮棒を通じて伝わっていると思います。リハーサルの段階では、言葉も使って表現していますが、技術的なことを言うときのみです。時には歌ったり、泣き声を出したり、いろいろな音を自分の声で発することもあります。しかし、最終的には、指揮棒の表現そのものなのです。だからこそ、指揮者によって音が変わる。一つの銅像を創るような過程を、オーケストラと共有しています。言葉でオーケストラと会話することと、指揮棒でコミュニケーションを図るという、この絶妙なバランスが大事ですね。そしてどの音楽も透明、つまりクリアであるべきなのです。たとえば、ブルックナーのように壮大な音楽であっても。楽団員には、『耳で音楽を創る』ということ常々伝えていきますし、読響はよく理解してくれていると感じています」

松井氏 「まもなく欧州公演ですね。メシアン、ドヴォルザークなどを指揮される予定ですが、本場の欧州でどのように日本のオーケストラをアピールされようとしているのでしょうか」

カンブルラン氏 「読響をクオリティの高いオーケストラとして紹介したいですが、それ以上に読響の持つ繊細さを伝えたい。どんなジャンルの曲でもその繊細さをもって表現できることを欧州の人たちに知ってもらいたい。欧州の音楽を欧州のオーケストラと同等に、あるいはそれ以上に演奏できるこ

とを証明したいと思います。欧州の聴衆は、オーケストラと指揮者の関係を敏感に感じ取ります。読響と育ててきた『信頼』を表現できることを楽しみにしています。今回のプログラムは、読響が楽曲ごとに瞬時に音を変えることができることを証明する最高の内容です。欧州の聴衆にとっても納得のいく演奏を届けることができると信じています」

松井氏 「メシアンやドヴォルザークの曲をそれぞれの都市でメインにされた狙いは？」

カンブルラン氏 「今回はベルリン、ケルンをはじめ、欧州の非常に良いホールで演奏します。街によっては伝統的な曲を好むところもあり、武満徹を取り上げるオーケストラはそう多くありません。でも、私は今回、日本人作曲家の曲をプログラムに入れたかった。バルトークのヴィオラ協奏曲もそれほど演奏機会は多くありません。バルトークはストラヴィンスキーでもなく、メシアンでもドビュッシーでもない。時代を超えた作曲家を取り上げる非常に特別なプログラムを届けたいと思ったのです。アイヴズの〈答えのない質問〉も演奏します。あまり知られていませんが、とても神秘的な曲です。ドヴォルザークが交響曲第9番を作曲したのは、アイヴズがこの曲を作曲するたった15年前の

ことなのです。ドヴォルザークが〈新世界〉を創り、それが20世紀への架け橋になったのです」

松井氏 「長く読響を聴き続けているとオーケストラの成熟を実感しますし、これからさらにどんなに素晴らしいオーケストラになっていくのか楽しみでもあります。今回の欧州公演も、飛躍になりますね。読響のさらなる発展に必要な要素は何でしょうか」

カンブルラン氏 「今でも素晴らしい状態だと思いますよ。ただ、一つの演奏会ごとに3日間練習、そして本番と細かく日程が決まっています。2時間の曲をたった3日間のリハーサルで仕上げるのは難しい。メシアンの4時間の大曲は、ほぼ不可能でしょう。読響がこのような素晴らしい曲を、現在あるリハーサルなどの制約上取り上げられないのは、今後の課題と考えられます。特別なことをするには新たな試みが必要だし、それが可能性を開くことになるでしょう」



松井氏 「マエストロにとって理想のオーケストラとは？」

カンブルラン氏 「大切なのは、オーケストラとしての確固たるアイデンティティを持つことではないかと思えます。私が思う最も素晴らしいオーケストラはロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団ですが、コンサートヘボウ管は、ベルリン・フィルと同じような演奏はしません。我々は、『自分たちならではの音を持つ読響』というアイデンティティが最も大切ではないでしょうか。私の望みは、世界中探してもど

こにもない音を奏でる日本のオーケストラ、読響という存在を世界に示すことです。読響に対してもコンサートヘボウ管を真似るのではなく、アイデンティティを確固たるものにするという方向性を持って取り組んでいるところです」

松井孝治 (まつい こうじ)

慶應義塾大学総合政策学部教授

1960年生まれ。東大卒業後、通商産業省に入省。2000年に退官後、参院議員(2期)。2012年に政界を引退した。読響の会員。慶應大では、統治機構(政治)とともに古典芸能の研究にも取り組んでいる。

■公演日程表

日程	会場	都市(国)	プログラム
2015年3月2日(月) 20:00開演	ベルリン・フィルハーモニー 大ホール	ベルリン(ドイツ)	A
3月3日(火) 19:00開演	ワルシャワ・フィルハーモニーホール	ワルシャワ(ポーランド)	A
3月5日(木) 20:00開演	ケルン・フィルハーモニー 大ホール	ケルン(ドイツ)	A
3月7日(土) 20:15開演	ティヴォリ・フレデーデンブルフ 大ホール	ユトレヒト(オランダ)	B
3月8日(日) 15:00開演	パレ・デ・ボザール	ブリュッセル(ベルギー)	B

■プログラム

- A 武満徹：鳥は星形の庭に降りる
バルトーク：ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン：ニルス・メンケマイヤー)
アイヴズ：答えのない質問
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉
- B 酒井健治：ブルーコンチェルト(読響委嘱作品・欧州初演)
メシアン：トゥーランガリラ交響曲
(ピアノ：アンジェラ・ヒューイット、
オンド・マルトノ：シンシア・ミラー)

指揮：シルヴァン・カンブルラン(読響常任指揮者)

2015年3月 読売日本交響楽団 欧州公演

■公演地紹介 ～ブリュッセル～

豊かな文化を育んだヨーロッパの要所 オヤマダ アツシ ■音楽ライター

2015年の欧州公演で有終の美を飾るのは、ベルギーの首都であるブリュッセル。石畳の大広場(グラン・プラス)がユネスコの世界遺産に指定されているこの都市は、12世紀頃から流通の要所として栄え、ヨーロッパの政治や宗教史、文化史においても重要な役割を果たしてきた。現在もEU(ヨーロッパ連合)やNATO(北大西洋条約機構)の拠点になっており、ヨーロッパの中心として時代をリードしている。

音楽史の中では15世紀から16世紀にかけて、ブリュッセルを含むフランドル地方から、ジョスカン・デ・プレを筆頭に多くの有能な作曲家を輩出。また美術においてもブルジョアたちがブリュッセルで活躍し、豊かな文化の発信地だったと言えるだ

ろう。音楽シーンでは、1700年に創立され、建物自体が歴史的な遺産である「モネ劇場」(ベルギー王立歌劇場)の存在が際立っている。かつてカンブルランが音楽監督を務め、来日公演も注目された由緒あるオペラハウスだ。

読響が3月8日(日)にコンサートを行う「パレ・デ・ボザール」は、アール・ヌーヴォー様式の外観が美しい文化センター。その中にある2100席の大ホール「Henry Le Bœuf(アンリ・ル・ブフ)」は、モダンな内装と鮮やかな音響が特徴であり、ベルギー国内外の著名なオーケストラがコンサートを行っている。カンブルランと読響による酒井健治およびメシアンの名演は、豊穡な響きとなってホールを満たすだろう。

■ブリュッセルへの想い

師とカンブルランの縁の地で演奏できる喜び

私の滞在していたアントワープからブリュッセルまでは電車で30分ほどなので、今度のツアーで訪れるパレ・デ・ボザール(Bozar)には、よく演奏会を聴きに通っていました。Bozarでは著名な演奏家や世界中のオーケストラの演奏会が毎晩開かれており、エリザベート王妃国際音楽コンクールの舞台でもあります。

私が留学中に師事していた先生は、以前ブリュッセルの王立モネ劇場で首席ヴァイオリン奏者を務めており、当時の音楽監督がカンブルラン氏だったそうです。今回弟子の私がカンブルラン氏とともにこの地で演奏することに、深い縁を感じています。



ヴァイオリン
渡邊千春

2006年から2年間、ベルギー・アントワープ王立音楽院に留学

読響 2015-16 シーズンの 聴きどころ 〈ソリスト編〉



ピアノ (海外)



アンドレアス・シュタイアー
©PAVEL ANTONOV

フォルテピアノなど古楽器の演奏で名高い**アンドレアス・シュタイアー** (5月)が、読響に初登場します。もちろん現代のピアノでの演奏にも卓越した技量を持っており、今回はそのモダン楽器でコンチェルトを弾く貴重なチャンスとなります。取り上げるのは、モーツァルトの隠れた傑作である**ピアノ協奏曲第17番**。現代の古典派演奏に不可欠な様式感をしっかり備えた、独自の音楽観を表します。



デニス・マツエフ
©PAVEL ANTONOV

ロシアを代表する名手**デニス・マツエフ** (6月)は、巨匠ユーリ・テミルカーノフからの直々のご指名で、2公演のために来日します。**プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番**は先鋭なモダニズムが炸裂する技巧的な作品だけに、ロシア伝統の奏風が全開となったパワフルな“爆演”にご注目ください。

フランスで期待を集める才媛**リーズ・ドゥ・ラ・サール** (11月)も初登場です。人気の**ラフマニノフのピアノ協奏曲第2**

番をフィンランドの名匠オスモ・ヴァンスカと共演し、強 韌な打鍵と軽やかなリズムで、会場を熱狂へと導きます。《大阪定期演奏会》でも、このコンビでお届けします。



リーズ・ドゥ・ラ・サール
©Lynn Goldsmith

欧州で高い評価を得るスイス生まれの新鋭**フランチェスコ・ピエモンテージ** (16年1月)は、リストの**ピアノ協奏曲第2番**で深い音楽性を披露します。ファンタジー豊かな曲想に合わせて、テクニックだけでなく独特の美意識と感性をもって、リスト作品の芸術性に迫ります。



フランチェスコ・ピエモンテージ
©Julien Mignot

ピアノ (日本)

ドイツを拠点に活動する**河村尚子** (5月)は、近年も充実した演奏を続けています。巨匠ユーリ・テミルカーノフとの**ラヴェル〈左手のためのピアノ協奏曲〉**は、双方にとって目新しいプログラム。意欲に満ちた新境地を見せてくれることでしょう。



河村尚子
©Hirofumi Isaka

9月には、ジャズ界の風雲児・**小曽根真**が、なんと読響常任指揮者のシルヴァ



小曽根真
©小山実穂

ン・カンブルランと心躍る初共演を果たします。演目は、小曽根が得意としている**ラフマニノフ〈パガニーニの主題による狂詩曲〉**。グループ感に富んだジャジーな感性を生かして、想像を超えたファンタジーあふれる世界へ聴衆を誘います。



辻井伸行
©Yuji Hori

ヴァン・クライバーン国際コンクール優勝を経て、世界各地で活躍する**辻井伸行** (16年2月)は2012年以來の登場。**ベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番**を、常任指揮者カンブルランと共演します。熱い気持ちがかもった豊かな音楽性の発露に、期待が高まります。



田部京子
©Akira Muto

近年ますます瑞々しい音楽性に磨きがかかっている**田部京子** (16年3月)は、**モーツァルトのピアノ協奏曲第20番**という短調の作品で、様式美ある“大人の演奏”を繰り広げます。



菊池洋子
©Marco Borggreve

よみうり大手町ホールでの《読響アンサンブル・シリーズ》では、古典派作品で定評を得た**菊池洋子** (11月)が、モーツァルトとベートーヴェンの**五重奏曲**を弾きます。木管楽器との合奏に注目です。充実した演奏活動を各地で展開している**小山実穂** (16年1月)は、シューベルトの傑作〈ます〉で、読響メンバーと極上のアンサンブルを紡ぎます。



小山実穂
©Kazuo Matsuura

ヴァイオリン

チャイコフスキー国際コンクール優勝後も躍進を続ける**神尾真由子** (6月)が、約4年ぶりに登場します。**サン＝サーンスの傑作、ヴァイオリン協奏曲第3番**はフランス流のエスプリが魅力。共演する指揮者フランソワ＝グザヴィエ・ロトのお国ものに当たるうえ、彼が得意とする古楽器奏法を生かした音楽作りとのマッチングに関心が集まりそうです。この曲も、《大阪定期演奏会》の目玉のひとつです。



神尾真由子
©Hirofumi Isaka

近年の進境が著しい実力派が**諏訪内晶子** (9月)。読響とは14年ぶりとなる共演で、**モーツァルトのヴァイオリン協奏曲第5番〈トルコ風〉**を艶やかに奏でます。近年は室内楽フェスティバルなどにも精力的に取り組んでおり、芸風の広がりを反映した懐の深いソロを聴かせてくれるでしょう。



諏訪内晶子
©Kiyotaka Saito

若くして濃密な音楽性を備える**郷古廉** (7月)は、銘器ストラディヴァリウスでベルクの**ヴァイオリン協奏曲**を披露します。



郷古廉

ドイツ期待の若手、**ヴェロニカ・エーベルレ** (7月)は、2014年にサイモン・ラトル指揮でロンドン響とのデビューを果たすなど、続々と世界の大舞台へ進出しています。読響とは**メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲**を演奏。共演する指揮者が、こ



ヴェロニカ・エーベルレ
©Berd Noelle

れまた注目の新鋭、ジェレミー・ローレルで、フレッシュな顔合わせです。



ダニエル・ゲーデ ©読響

読響コンサートマスターの**ダニエル・ゲーデ**(7月)は、元ウィーン・フィルのコンサートマスターという経歴を誇る名手。ブーム



エリナ・ヴァハラ ©Laura Riihela

スの**ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲**での輝かしい音色は要注目です。欧米で注目を浴びるフィンランド出身の**エリナ・ヴァハラ**(11月)は得意のシベリウスで、この作曲家の生誕150周年に華を添えます。



アレクサンダー・シトコヴェツキー

メニューインに認められた俊英**アレクサンダー・シトコヴェツキー**(6月)は、よみうり大手町ホールでのアンサンブル・シリーズで読響デビューを果たします。

弦楽器・管楽器など



鈴木康浩 ©読響

読響が世界に誇る“ヤス”ことソロ・ヴィオラの**鈴木康浩**(10月)。ヴィオラのための傑作を数多く残した**ヒンデミット**が、親しみやすい民謡の旋律を基に協奏曲風に仕上げた**〈白鳥を焼く男〉**で、この楽器の魅力を存分に発揮してくれるでしょう。



宮田大 ©Yukio Kojima

チェロの**宮田大**(4月)は、日本を代表する大器へ成長している最中の気鋭です。チャイコフスキー**〈ロココ風の主題による変奏曲〉**で、美しい旋律を朗々と歌い上げます。読響

とは昨秋、エルガーのチェロ協奏曲で好評を得るなど、関係を深めています。

ドイツを拠点に活躍する実力派の**グスタフ・リヴィニウス**(7月)は、**ダニエル・ゲーデ**と**ブラームス**の**二重協奏曲**を演奏。

旧EMIレーベルからCDをリリースしている新星チェリストの**アンドレアス・ブランテリド**(8月)は、ロンドン・フィルやライブツィヒ放送(MDR)響に続いて、待望の日本デビューを飾ります。



アンドレアス・ブランテリド ©Sussie Ahlburg

ソリストや室内楽奏者として着実にキャリアを積んでいる**遠藤真理**(9月)は、よみうり大手町ホールでの**ハイドンのチェロ協奏曲第1番**で優れた技巧を發揮します。



遠藤真理 ©中山かつみ

ウィーン・フィルのハーブ奏者として世界の聴衆を魅了している**グザヴィエ・ドゥ・メストレ**(16年1月)は、「南米のバルトーク」**とも**称賛される**ヒナステラ**の**ハーブ協奏曲**を、鮮やかな指さばきで聴かせます。



グザヴィエ・ドゥ・メストレ ©Marco Borggreve

数々の国際ギター・コンクールで優勝している**朴葵姫**(16年3月)は、**ロドリゴ**の名作**〈アランフェス協奏曲〉**で、スペインの香りに満ちたドラマを作り上げます。



朴葵姫

世界的トロンボーン奏者の**クリスチャン・リンダバーグ**(5月)とともに**サンドストレーム**の作品でソロを務めるのは、読響首席ト



クリスチャン・リンダバーグ ©Mats Backer



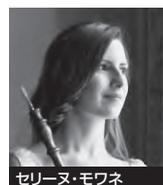
柴田晃 ©読響

ロンボーン奏者の^{くわたあきら}**柴田晃**。丁々発止の掛け合いにご期待ください。



金子平 ©読響

読響からは首席クラリネット奏者の**金子平**(5月)も、**ニールセン**の**クラリネット協奏曲**に登場。洗練された音色と技巧を駆使して、北欧の叙情をさわやかに描き出します。



セリーヌ・モワネ

人気のオーボエ奏者**セリーヌ・モワネ**(10月)は、ドレスデン国立歌劇場でソロ・オーボエを務める実力者。甘い音色をご堪能ください。

歌手

注目の**ワーグナー**〈**トリスタンとイゾルデ**〉(全3幕/演奏会形式、9月)には、カンブルランが音楽総監督を務めるシュトゥットガルト歌劇場の、2014年7月の新演出上演で成功を収めた声楽陣が、ほぼ同じメンバーのまま来日します。トリスタン役は、欧州の主要歌劇場に次々とデビューしている若手**エリン・ケイヴス**。イゾルデ役は、迫力ある歌唱が魅力の**クリスティアーネ・イーヴェン**。ブラングーネ役は、ワーグナーを得意とし、フランクフルト歌劇場などで歌う**クラウディア・マーンケ**。マルケ王役は、ワーグナーの本場バイロイト音楽祭の常連の**アッ**



エリン・ケイヴス



クリスティアーネ・イーヴェン ©Christine Schneider



クラウディア・マーンケ ©Monika Rittershaus

ティラ・ユン。その他、シュトゥットガルト歌劇場の専属歌手の**石野繁生**らが脇を固めます。



アッティラ・ユン

ドイツのアルテンブルク・ゲラ市立歌劇場に長年出演し、栄えある「宮廷歌手」の称号を得たバリトンの**小森輝彦**(4月)は、カンブルランの指揮でリームの**〈厳粛な歌—歌曲付き〉**を日本初演します。バイロイト音楽祭に出演するなど、国際的に評価が高いメゾ・ソプラノの**小山由美**(6月)は、巨匠ユーリ・テミルカーノフが振る**マーラー**の**交響曲第3番**でソリストを務めます。



小森輝彦



小山由美

年末恒例の**〈第九〉**(12月)では、上岡敏之の指揮で国際的に活躍する4人が歌います。ソプラノの**イリーデ・マルティネス**は、ミラノ・スカラ座やウィーン国立歌劇場などで人気を高める歌姫。メゾ・ソプラノの**清水華澄**は、伸びやかな美声と類まれな音楽性を誇る期待の新星です。テノールの**吉田浩之**は、軽やかで透き通る声が魅力の経験豊かな本格派。バリトンの**オラフ・シグルザルソン**は、ザールブリュッケン歌劇場などドイツを中心に歌っている実力者です。



イリーデ・マルティネス ©Grupo Nación



清水華澄



吉田浩之 ©Eiji Shinohara



オラフ・シグルザルソン ©Karl Pettersson

Concert Schedule

2015. 3月

交響曲とオペラアリアなどでモーツァルトの魅力に迫る！
世界の聴衆を魅了する歌姫メイが、美声を披露

2015年3月19日(土) 19:00 サントリーホール

◆第580回サントリーホール名曲シリーズ

2015年3月21日(土) 14:00 東京芸術劇場

◆第175回東京芸術劇場マチネーシリーズ

指揮：ジェラルド・コルステン

ソプラノ：エヴァ・メイ

モーツァルト：交響曲第38番〈プラハ〉

モーツァルト：演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉

モーツァルト：演奏会用アリア〈うるわしい恋人よ、さようなら〉

モーツァルト：歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲

モーツァルト：歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿”

モーツァルト：歌劇〈イドメネオ〉から“オレステとアイアスの苦しみを”

モーツァルト：交響曲第35番〈ハフナー〉

*曲目が一部変更されました。



ジェラルド・コルステン



エヴァ・メイ

ヨーロッパで活躍する名匠コルステンが4年ぶりに登場
二つの傑作〈ジュピター〉& 〈英雄の生涯〉を指揮

2015年3月27日(金) 19:00 サントリーホール

◆第546回定期演奏会

指揮：ジェラルド・コルステン

モーツァルト：歌劇〈劇場支配人〉序曲

モーツァルト：交響曲第41番〈ジュピター〉

R.シュトラウス：交響詩〈英雄の生涯〉



ジェラルド・コルステン

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00/年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

3月公演の聴きどころ

渡辺 和彦

(わたなべかずひこ・音楽評論家)

3月の読響は、《サントリーホール名曲シリーズ》(19日)と《東京芸術劇場マチネーシリーズ》(21日)、そして《定期演奏会》(27日、サントリーホール)のすべてが、ジェラルド・コルステン指揮。このうち、別項にもあるように、《定期》以外の19、21日は、人気ソプラノのエヴァ・メイが客演して、モーツァルトの交響曲2曲の間にアリア4曲が歌われる。

指揮者コルステンは2008、11年に続く3度目の読響客演。前回もエヴァ・メイとの共演があった。コルステンはもともとガラミアンやヴェーグに学んだヴァイオリニストで、1987年から96年までヨーロッパ室内管弦楽団(クラウディオ・アバド指揮)のコンサートマスターとして活躍。この間、ソリストやコンサートマスターとして「11回か12回」(前回来日時の本人インタビュー)日本を訪れている。

今回のプログラムである〈英雄の生涯〉他は、11年3月14日(東日本大震災3日後)に読響と共演する予定が、計画停電の影響等で公演キャンセルになったプログラムとまったく同一。なお彼は現在、ロンドン・モーツァルト・プレイヤーズの音楽監督の地位にある。

《定期》は、〈英雄の生涯〉と、モーツァルト〈ジュピター〉。前者はコンサートマスターによる長いヴァイオリン・ソロ(今回は長原幸太が担当する)があることで知られる。このパートに人を得ると、〈英雄の生涯〉は一層聴きばえがする。ヴァイオリニスト出身のコルステンが、そのあたりのツボを心得ているのはもちろんだ。彼のモーツァルトも、《定期》と19、21日で「後期6大交響曲」のうちの3曲(第35、38、41番)が聴ける。

エヴァ・メイについては「今さら」と言われるのを覚悟で紹介すると、モーツァルト作品やイタリア・オペラのリリコ・レジーエロとして、また教会音楽のソリストとして世界の歌劇場で歌っているイタリアの名ソプラノ。日本へは05年に初来日、以後来日を重ねている。

もうひとつ、2月に続いて3月も、東京芸術劇場との提携事業として、30日に《0才から聴こう!! 春休みふれあいコンサート》が予定されている。この日の指揮者、梅田俊明は06年まで仙台フィルの常任指揮者を務め、これまで読響への客演も多い。